

必修科目「英語 IB」への EnglishCentral 導入プロジェクトを終えて

The impact of EnglishCentral on the students of “English IB”

石川県立大学 教養教育センター 田村 恵理

1. はじめに

平成 26 年度後期に開講した 1 年生必修英語科目「英語 IB」は、教科書として『VOA News Clip Collection』（成美堂）を使用する事が春時点で決定済であった。この教科書は、Voice of America News (VOA) の動画から選定されたトピックをもとに英語学習できるよう編集されている。そして、各 Unit において 2 分間程度の動画をもとにリスニング、リーディング、スピーキング、ライティングの四技能を総合的に伸ばす事が狙われている。

この教科書との併用が成美堂から推奨されているのが、オンライン E-Learning 教材、EnglishCentral である。本プロジェクトでは、EnglishCentral の有償版コンテンツ「プレミアムアカウント」を本学「英語 IB」履修の全 3 クラスに提供し、学習管理を行った。それにより、以下の二点を目指した。

- 1) 学生の実用的な英語運用能力の向上。
- 2) 学生の英語学習へのモチベーションを上げる。

本稿ではこの取り組みについて報告する。

2. EnglishCentral について

EnglishCentral (以下 EC とする) とは、インターネットサイト上に用意された短時間の動画を視聴させる事により、英語学習を促すコンテンツである。機能を大まかにまとめると以下の通りである。

- 1) 独自の音声認識技術を使用し、10,000 本以上の web 動画で英語を「話して」学習

する双方向性型の学習ツール。

- 2) インターネット上に毎週追加される動画は 40 以上のトピックにわたる。学習者は、留学準備講座、ビジネストピック、ニュース、有名スピーチ、海外 CM 等、多数の動画の中から気に入った教材を見つける事が可能。
- 3) 最大の特徴は、学習者の発話診断機能を持つ事。

EC の動画教材は無料でも一部利用できるが、有償版コンテンツも準備されている。この利用権利「プレミアムアカウント」を取得すると、以下の利点がある。

- 1) 学習者は、使用制限なく発話診断機能を使う事が可能。
- 2) 教員は、自分のクラスの学習者個々人の学習記録データを管理できる。

本プロジェクトにおいて EC プレミアムアカウント導入を考えたきっかけは、「CALL 教室 + 従来の教材の組み合わせ」で授業を行う事に対する一種の閉塞感である。本学の CALL 教室は 54 台の学習者用コンピュータを備え、動画や音声再生機能も充実している点で、英語教育環境上のハードとして大いに期待できる。しかしソフトとしての教材に目を向けてみると、大学授業向けの英語教材、特に動画音声素材のほとんどが授業内での学生の「一斉視聴」を想定しているという現状がある。その為、いかに高機能の教室を使用している、習得の早い学生と遅い学生の足並みを無理に揃えさせなければスムーズな授業展開は難しい。筆者はそこに

もどかしさを感じていた。

その点で、ECという教材は、学生がインターネットサイトを介して各自で興味ある分野の動画教材にアクセスできる、という点が画期的であった。CALL教室で一名に一台ずつ割り当てられたコンピュータから、学生はそれぞれ教材を選択して学習できる。更に注目すべきなのはその管理体制である。管理体制の全く無い状態で学生にインターネットへの自由なアクセスを許してしまえば、授業時間内に英語学習以外の事をしてしまう者が多く出、授業としての統制がとれなくなる危険性が大きい。しかしECの有償コンテンツを利用すれば、教員は、学習者の学習履歴のみならず発音の得手不得手に関する情報や録音された発音音声もたどることができる。これにより、学習者の努力を、教員が客観的且つ定期的に評価し続けることが可能となる。

そのうえ、ECの動画プレーヤーは言語学習に特化した種類のものである。例えば英語・日本語双方の字幕の有無が学習者によって手軽に切り替え可能で、動画再生中に、発話される重要単語のタイピングやクイズへの回答を学習者に要求できる。

また、ECの発話診断機能により、学習者は発音の練習を、マイク付きヘッドホンを通じて個々人で進めていける。大勢のクラスメイトの前で発音させられる際にありがちな気恥ずかしさを感じる事なく、各自でアドバイスの従った発音矯正を受けられるのである。

ECの動画素材の放映時間は一種類につき1分未満から3分までが多数と短時間の為、学習者によっては相当の分量の視聴が可能である。そして、その学習記録は教員と学習者双方から確認できる為、学習者のモチベーション維持への活用も期待できる。

実際に、ECの実績は認知され始めていた。例えば、NHK主催の教育コンテンツ国際コンクール「日本賞」で2011年に、世界中の参加作品

の中から優秀作品に入選している。特に有償版は、2012年春学期には50の大学で契約が結ばれ、2013年春には一万名近くの学生に導入された。導入後の学生の資格試験スコアアップの報告も多い。この可能性ある教材を用いながら、本学のCALL教室の機能を活用した英語教育への新しい方向性を探りたい、という思いが本プロジェクト立案における強い動機付けであった。

以上から、本プロジェクトにおいては授業内、課外学習の双方においてECを活用し、教科書学習を更に定着させる事を期待した。このプレミアムアカウント4ヶ月間の利用料は、学生1名につき¥2,295(税込)。本プロジェクトにより、「英語IB」履修者はこのサービスを無料で受けられる事となった。(注1)

プロジェクト企画当初の計画は以下の通りである。

- 1) 授業は本学のCALL教室(K205 語学演習室)にて行う。
- 2) 授業ではまず、教科書で扱われる動画をクラスで一斉視聴し、教科書の問題に取り組む。
- 3) 授業後半30分間では、学生コンピュータからEC有償版コンテンツにアクセスさせ、各自選んだ動画をもとに学習させる。
- 4) 3)の学習記録データを筆者が管理し、その作業状況を成績に組み入れる。学生は講義外の時間もインターネットを介してECにアクセス可能な為、課外学習の成果も成績に含めて、自主学習を促す。

3. アカウント登録にまつわるトラブル

プロジェクトの開始日は、本学における筆者の後期授業が開始した2014年10月1日である。この日以降、企画時点では想定していなかったトラブルが発生した。トラブルは大きく分けると二種類あった。ECのアカウント登録にまつわるものと、授業教室となる本学語学演習室

(K205)においてECの発話診断機能を利用する際のものである。

まずECのアカウント登録にまつわるトラブルから説明する。教員が学生のEC学習状況を管理する為には、学生をECにアカウント登録させ、なお且つあらかじめ教員の用意したクラスサイトに誘導しておくという二段階の手順を踏む必要があった。そこで筆者はEC上に全3クラスのクラスサイトを作成した後、そのURLを授業内で提示した。そうする事で、授業教室のコンピュータからクラスサイトを經由して学生にアカウント登録させようとしたのである。ところが、指示通り登録できない学生が多数出、一時収集がつかない状況にまでなった。

なぜ指示通り登録できない学生がでたのだろうか？アカウント登録において、学生には以下の事項の入力を求めていた。

1) メールアドレス

本学が学生に配布する e-mail アドレス

[p 学生番号 @ishikawa-pu.ac.jp]

(大学配布のものに限定して登録の指示をした。)

2) パスワード (各自任意のもの)

3) ユーザー名

(和文表記の姓名に限定して登録の指示をした。)

最も多かったのは、1) の入力ミスだった。まず、大学からメールアドレスが自身に割り当てられている事自体を知らない学生が複数いた。そして、自分に割り当てられた大学のメールアドレスは知っていても、そのメールアドレスに馴染みのない学生が多かった。その為、特に @ 以下(ドメイン名)の入力ミスが頻発した。例えば、以下のようなミスである。

A) (正) ishikawa → (誤) isikawa (h 無し)

B) (正) ishikawa-pu → (誤) ishikawa_pu (ハイフンをアンダーバーに)

C) (正) ishikawa-pu → (誤) ishikawa.pu (ハ

イフンをドットに)

その他、他の学生の大学メールアドレスを誤入力して登録しようとする学生さえいた。2) のパスワードについても、登録時に自分の設定したパスワードを忘れ、二回目のログイン以降サイトに入れなくなる学生が出た。3) のユーザー名については、和文表記の姓名にするよう指示されているにも関わらず、ここにハンドルネームや学生番号を設定する学生が出て、管理画面において学生の身元を確認し辛くなる事態となった。

こういったトラブルから感じられるのは、学生が、教員の想像以上にコンピュータ操作に慣れていないという事実である。スマートフォン経由でのラインが日常的なコミュニケーション手段として定着してきたせいも、まず e-mail を日常使用している学生が少ない。そしてメールアドレスを正確に入力できない。(注2) 目の前に正しいメールアドレスを表示して見せたいえでも誤入力をし、そのミスに気づく事ができない。その為、登録ミスの認識が本人に無い事が多く、登録訂正をさせるまでに大変な手間と時間がかかった。

ただ、現在のECのアカウント登録システムは管理しやすいよう改良されている為、このようなトラブルを引き起こす可能性は少なくなっている。学習者が「ユーザー名」にきちんと氏名を入力しておけば、クラス管理者に認識可能となったとの事で、馴染みのない大学メールアドレスを登録させる必要はもはやないようだ。(注3)

4. 教室において発話診断機能を利用する際のトラブル

次に二つ目のトラブル、ECの発話診断機能を利用する際に生じたものについて説明する。2.の末尾で述べた通り、筆者はECを課外学習用だけでなく、本学語学演習室(以下 K205 教室と

する)における授業時間内にも使用するつもりであった。しかし、K205 教室での授業内使用環境において、EC の発話診断機能の学生一斉使用がとても難しい事が分かってきた。発話診断機能を K205 教室で使用する際、学生用コンピュータに接続されているマイクが、学生の発話をうまく認識しないトラブルが続いたのである。この為、授業内で発話診断機能の一斉使用を可能にする事は最後までかなわなかった。このトラブルに関する時系列は表 1 に記載する。表 1 の通り、このトラブルが大幅に解消される現象が、2014 年 12 月 5 日に一度見られた。筆者は K205 教室で授業を行う際、CALL システム「パナソニック L3 Stage EZV」に学生を必ずログインさせている。しかし、この CALL システムへのロ

日付	出来事 (補足)
2014/10/22	K205 教室の PC での発話診断機能の不具合報告最初の 1 件 (ここから発話診断機能がほぼ全ての台で機能しない状態が長く続き、業者と連絡をとり続けながらも解決策が見つからない。)
2014/11/12~14	本学桶教授、辻野氏に相談 (授業内外で K205 教室の PC の状況確認を依頼。)
2014/11/25~12/2	K205 教室にシステム保守業者が入り、状況確認、PC の一斉更新
2014/12/5	1 クラスにおいて状況改善 (本学 CALL システム L3StageEZV から一旦全ての学生をログアウトさせたうえで EC にログインさせると、約 9 割の学生の台で使用が可能になった。)
2014/12/24	1 クラスの授業内で発話診断機能を一斉使用、機能しない学生が数名
以降	EC を課外学習用に切り替える

表 1 本学 K205 教室における、EC 発話診断機能使用に関するトラブル時系列

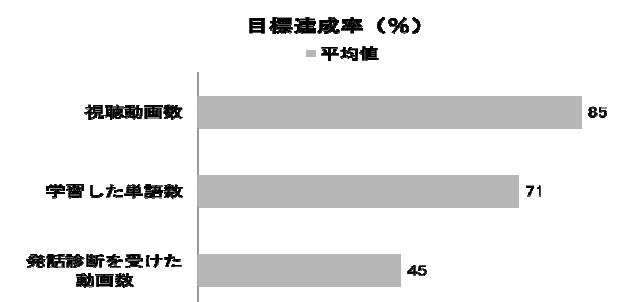
グインをやめさせ、EC のみにログインさせる事で、授業内での発話診断機能の一斉使用を「おおむね」可能にする事ができた。しかしそれでも、全員のコンピュータが EC の発話診断機能を問題なく使用できる状態になる事は一度もなく、この問題の原因にまではたどり着けなかった。このような経緯で、最終的に授業内での EC 発話診断機能の使用は断念し、EC を完全に課外学習用に切り替える方針に転換した。授業での使用を考えていたのは主に発話診断機能であった為、この結果は残念であった。(注 4)

5. 課外学習の目標設定と使用状況

とはいえ、EC は発話診断以外にも様々な機能を備えている。自宅のコンピュータから発話診断機能が使用可能という学生の声もあった。授業内一斉使用でなければ、K205 教室でも個人的に発話診断機能が使用可能な場合もあるようだった。そこで、学生には課外学習のノルマを課した。分量としては、EC が標準的な学習量として推奨する、表 2 の数値に設定した。表 2 における「習得する単語数」とは、タイピングや単語テスト機能で学生が習得した単語数の事である。EC のクラス管理画面上では、学生の週毎の目標学習量を設定できる。これを管

項目	目標数値
視聴動画数	5
習得する単語数	50
発話診断を受ける動画数	5

表 2 学生に提示した、EC 学習量 (1 週単位) の目標設定



グラフ 1 EC の使用状況 (目標設定に対する達成率平均値)

理者が設定すると、クラスの所属学生はECログイン時に、ノルマ達成までに必要となる作業量を確認できる。授業内でも毎回、ノルマの数値を口頭指導した。

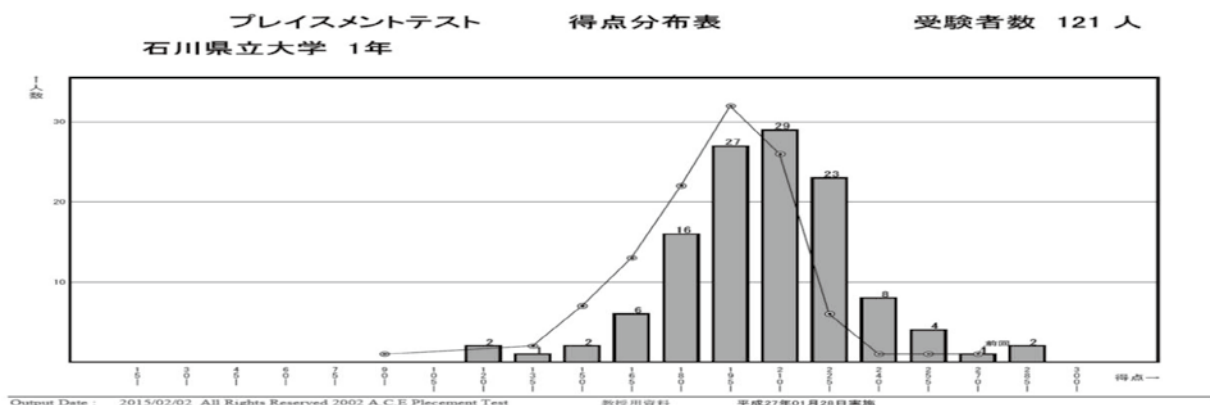
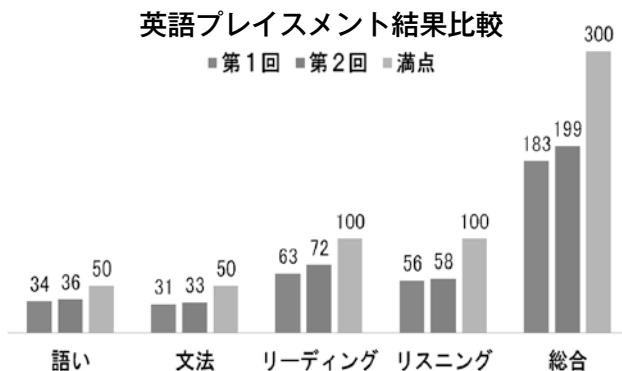
では学生が実際にECをどの程度利用したのか。導入から二週間程経過した2014年10月15日を開始時点と設定し、そこから2015年2月10日までの学習データをもとにEC使用状況の平均値をとった。ノルマとして課した目標設定を100%とした場合の達成度がグラフ1である。発話診断機能の達成度の低さが目立つ。この点について後ほど検証したい。

6. ECの効果検証

平成26年度「英語IB」受講者に対するECの学習効果について客観的データを得る為、EC導入直後の2014年10月初頭（10月15日、17日）と、授業最終段階の2015年1月末（1月28日、30日）の合計二度、業者作成の試験を受講者に対して行った。水曜授業と金曜授業のクラスがある為、各回二日間の試験日となっている。使用した試験問題は、NPO法人英語運用能力評価協会（これ以降ELPAと表記する）の提供する、「英語プレイズメント」である。問題は全てマークシート形式。設問数は全60問、試験時間60分、0～300点のスコア制で、語い、文法、リーディング、リスニングの4つの観点から力を測る仕組みである。ELPA

の公式ウェブサイトによれば、この試験は大学入学時標準英語範囲レベルで、英検3級～2級、TOEIC300点台～700点程度の英語習得レベルの人の力を測るのに適している。（注5）このレベルが2014年度時点での本学学生の平均レベルと一致する点、そして、通常の講義時間内に無理なく試験を終える事ができる点から、この試験の採用を決定した。なお、第1回目と第2回目の試験は、設問形式は同じであるが、問題内容は異なる。

試験各回の平均スコアはグラフ2の通りである。項目ごとに3本の棒があるが、左側は第1回試験、中央が第2回試験の平均である。右側は満点のスコアで、項目ごとに満点が異なる為、参考に記載した。結果を見ると総合、語い、文法、リーディング、リスニングのどの項目においても、微量なスコア上昇がみられる。これをどう解釈するかは難しいところだが、意外なのは、大きな伸びを期待したリスニングよりもリーディングのスコアの方が顕著に上昇してい



た点であった。(注6)

この結果を試験各回の総合スコア分布の比較から考える。グラフ3は、これに関するELPA提供による資料である。折れ線グラフが第1回試験、棒グラフが第2回試験の分布状況である。グラフ水平右方向にいく程高得点を示している。このグラフからも、受験者全体の得点分布に関して、第2回試験の方が高得点方向に位置している事がわかる。

しかし、試験内容が異なるだけに、この結果だけでは学生の英語力上昇を裏付けるには心もとない。そこで、この試験結果についてt検定による分析を行った。それぞれの項目に関する結果を表3とグラフ4に示す。t検定においては、語い、文法、リーディング、リスニング、総合の全ての項目において、少なくとも5%の有意水準で有意と出た。この事から、第1回試験日から第2回試験日の間に使用したECが、教材として学生の英語総合力上昇に貢献をした可能性も否定はできない。

7. 利用学生の反応

ECを利用した学生の反応についてはどうか。これを知る為に、英語IBの講義終了時にアンケートを実施した。集計対象は受講者107名、うち生産科学科31名、環境科学科37名、食品科学科39名である。質問項目ごとに表示する。

1) ECで便利な機能

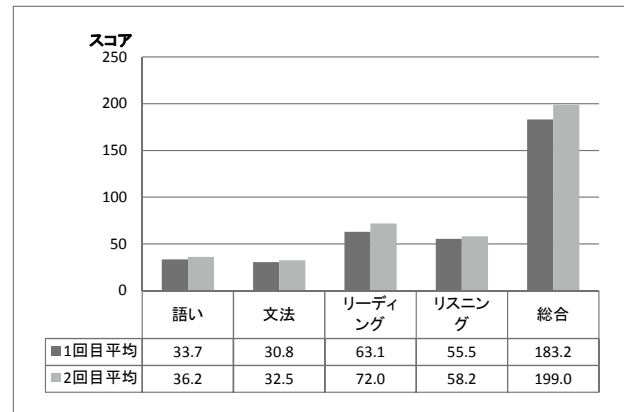
回答のあった88名中の大まかな分布はグラフ5の通りである。授業内での一斉使用にトラブルが続いたにも関わらず、最も多かったのが発話診断機能だった。この機能を利用できた学生には好評だったようだ。理由として以下の点が挙げられた。

- ・スピーキングは普段あまりしない事だったので目新しい。
- ・発音する機会ができた。
- ・ネイティブスピーカーの発音と比較できる。

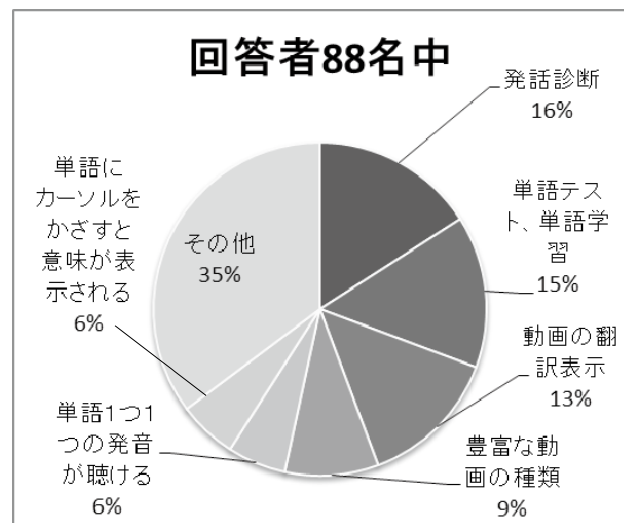
(df = 231)

	1回目平均	2回目平均	平均差	t	有意水準
語い	33.7	36.2	2.4	2.644	p<.01
文法	30.8	32.5	1.7	2.277	p<.05
リーディング	63.1	72.0	9.0	4.557	p<.01
リスニング	55.5	58.2	2.7	2.029	p<.05
総合	183.2	199.0	15.8	4.635	p<.01

表3 英語プレイスメントスコア比較からみる、英語IB受講生の英語力の変化 (t検定)



グラフ4 英語プレイスメントスコア比較からみる、英語IB受講生の英語力の変化 (t検定) グラフ



グラフ5 アンケート結果 ECで便利だと思った機能

二番目に挙げたのが単語テスト、単語学習機能であった。これには以下のようなコメントがあった。

- ・何度も繰り返して覚えられて便利だった。
- ・単語テストが覚えやすい。
- ・分からない単語をクリックすると My 単語に追加されて、後でテストできる機能が良い。

三番目は動画の翻訳表示であった。以下のようなコメントがあった。

- ・テスト前に役立った。
- ・訳があり、予習がはかどる。

四番目には豊富な動画の種類が上がった。これについては、以下のような指摘があった。

- ・初級から上級までのレベル別で選択しながら視聴可能なので、自分のレベルに合わせて取り組める。
- ・カテゴリが色々あるので、興味のあるものを見られる。

その他の部分に含まれる便利さへの指摘も以下に挙げる。

- ・本当に使われているスピード、発音で英語を聴くことができ良かった。
- ・スマホのアプリで利用できる。
- ・リスニングの練習になった。
- ・動画で話されている英文や翻訳を、表示にも非表示にも切り替えられる機能。
- ・動画に付属している単語解説が便利。わからない単語にカーソルをあてると発音も聴ける。
- ・英文の書き起こし全文が出る。
- ・動画に字幕が出る。
- ・動画を繰り返し見ることができる。
- ・間違えた単語のスペルを1文字ずつチェックできる。
- ・一週間の学習状況が分かる機能。
- ・目標設定が提示されていてよかった。
- ・長文の話し方が学べる。
- ・途中で学習をやめても、次回にやめた箇所から始められる。
- ・ゆっくり発音してくれる機能。
- ・好きなタイミングで勉強できる。
- ・いろんな形式で勉強できる。
- ・学習状況のクラス内ランキングがあったので、やる気が出た。
- ・リスニング→単語学習→スピーキングとい

う学習段階の流れが良い。

- ・音で覚えられる。

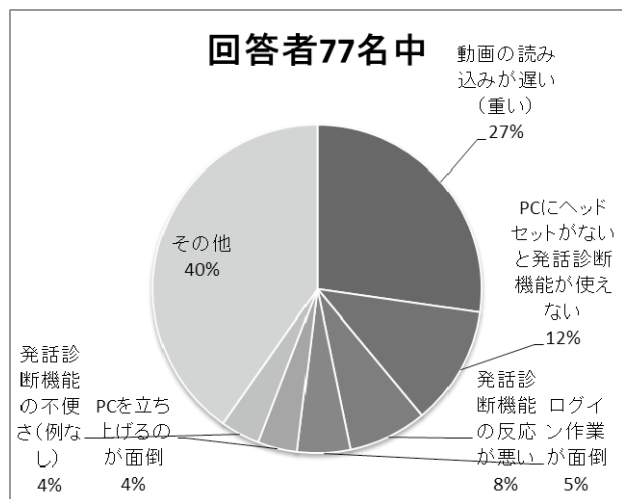
2) EC 使用において不便だった点

回答のあった77名中の大まかな分布はグラフ6の通りである。最も多かったのが、動画の読み込みが遅いという点で、以下のようなコメントがあった。

- ・途中で映像の流れている画面がバグだったのか、おかしくなって使いづらくなった。
- ・単語学習の時、次の単語に行くのが遅い。
- ・たまに／必ずフリーズした。
- ・動画の再生に時間がかかる／スムーズに再生できない。
- ・通信が切断しやすい。

二番目に多かった「PCにヘッドセットがないと発話診断機能が使えない」という点に関しては、これが原因で自宅でのECの発話診断機能の利用が不可能だった、という声があった。また、三番目の発話診断機能の反応の少なさについては、「どう頑張ってもPCが発音を認めてくれない」という意見も出た。四、五番目に挙げたのは、PCを通じてECを使用する際の手間で、PCの立ち上げから、ログイン時の入力作業を面倒と感じる学生がいたようだ。

その他の部分に含まれる主な意見も以下に挙げる。



グラフ6 アンケート結果 EC使用において不便だった点

- ・接続状況が悪い時にログイン不可能な事があった。
- ・学内の PC でスピーキングを行うのが恥ずかしい（周囲に他人がいる為）。
- ・PC を起動できる環境でないと学習できない。
- ・家で EC が使用不可能だった。
- ・単語のタイピング機能が不便。
- ・自宅に PC が無い。
- ・単語ドリルの融通のきかなさ。
- ・学内では、幾つかの機能が使えなかった。
- ・単語テストが 10 問ずつしか出題されない点。
- ・単語テストの四択のうち、不正解の選択肢が明らかにおかしい。
- ・学内では、PC の台によって発話診断ができない。
- ・単語テストの定着性について疑問を感じた。
- ・スマホでうまく使えない。
- ・スマホだと単語テスト機能が使えない。
- ・発話診断機能の使い方が良く分からなかった。
- ・発話診断ができるページとできないページがあった。
- ・発話診断をする時間が限られた。
- ・（単語テストで打ち込む？）単語が大文字（表記）なこと。
- ・家にインターネット設備が無い人には色々不便。
- ・音質が悪い。
- ・発話診断機能自体は便利ではあるが、利用する動作環境が良くなかった。
- ・クラス内の総合順位が表示されなかった。
- ・なぜか学習状況が 95% から上がらなかった。

EC の使用法に関してあまり知識を得ないまま授業期間を終えた学生もいた事から、上記コメントの中には単に本人の知識不足による誤解

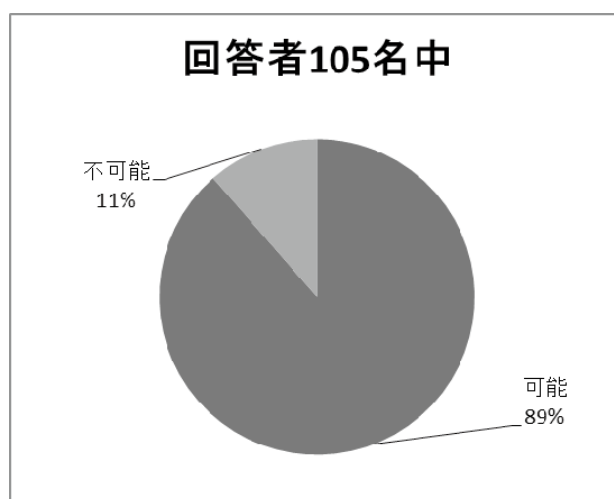
から出た感想も含まれている。しかし、直感的な操作だけでは EC の機能を使いこなす事が出来なかった学生もいた事実を認識する必要があるように思う。

EC 導入後暫くして、学生の自宅における利用環境の個人差を感じるようになった為、アンケートには以下のような質問も含めた。自宅における PC 環境に関する 2 問である。

3) 【択一質問】自宅に PC を使って EnglishCentral にログインすることが可能か？

回答のあった 105 名中の分布はグラフ 7 の通りである。自宅でのインターネット環境が無い学生は約一割おり、この学生は EC 自体を学内でないと利用できなかった事になる。不可能を選択した回答者のコメントとして以下が挙げた。

- ・自宅に PC が無い。
- ・自宅の PC が古く反応が遅いので、動画再生が不可能だった。
- ・自宅に wi-fi 設備が無い。
- ・自宅でインターネット契約をしていない。

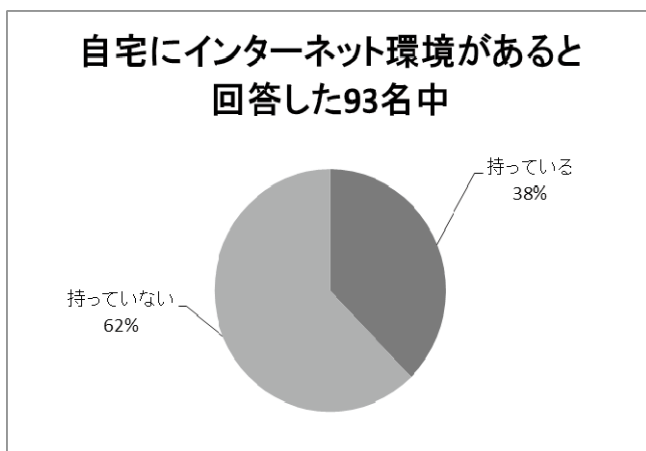


グラフ 7 アンケート結果
自宅の PC から EC にログイン可能か？

4) 【3）で可能と答えた回答者のみに択一質問】自宅の PC につなぐヘッドセットを持っているか？

回答のあった 93 名中の分布はグラフ 8 の通

りである。自宅にインターネット環境がある学生のうちヘッドセットを持っていない約6割の学生は、自宅ではECの発話診断機能を使用できなかったという事になる。(注7)「ECを使用する為にヘッドセットを購入した」という回答が1名あったものの、大部分の学生は新しくヘッドセットの購入を考えるまでのモチベーションには至らなかった。また、「ヘッドセットが高価だから買えない」という回答も見られた。(注8)



グラフ8 アンケート結果
自宅PCにつなぐヘッドセットを持っているか？

アンケートの最後に、以下の質問をした。

5) 【選択肢あり・複数回答可】EnglishCentralのスピーキング機能は、今後どのような環境になれば利用しやすいか？

104あった回答の内訳はグラフ9の通りである。最も多かったのが、「ヘッドセット付PCのある個人ブース」の学内設置を求めた意見だった。2番目のスマートフォンでの利用に関しては、後ほど述べたい。その他の意見としては、以下が挙げられた。

- ・ヘッドセットが高いから、大学で学生用に購入してほしい。
 - ・大学にwi-fiがあると良い。
 - ・アプリを使えば、スマホでも発話診断機能を利用できた(少なくともiPhoneでは)。
- アンケートの結果明らかになった本学におけ

るEC使用の問題点は、ECの発話診断機能に関する以下の2点に集約される。

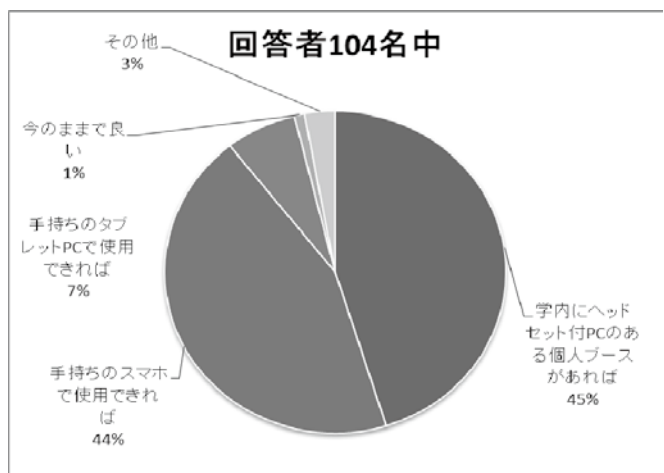
- 1) 現在の学内環境では、発話診断機能は利用しにくい。
 - 「周囲に他の学生がいるなかで、K205教室で放課後に発話練習する事が恥ずかしい」と感じる学生が複数いた事実。
- 2) 自宅においても、発話診断機能は利用しにくい。

→自宅にインターネット環境がない学生が全体の約1割いる事実。

→自宅でインターネット環境がある学生のうち約6割は発話診断に必要なヘッドセットを持っておらず、発話診断機能を利用できていなかった事実。

まとめとして、ECの発話診断機能を本学において運用しやすくする環境として、以下の2点への希望が複数挙げられた事を報告したい。

- 1) 学内のwi-fi環境の整備
- 2) 学内にヘッドセット付PCのある個人ブースを設置する事



グラフ9 アンケート結果
ECの発話診断機能は、どのような環境になれば利用しやすいか？

8. むすび

企画段階では想像のつかなかった問題に直面し、プロジェクトは決してスムーズな展開とはならなかった。最も期待した発話診断機能の利用

率が、思うように伸びなかった事は残念である。一方で、ECを十分に活用した学生も見られた事、何よりも学力診断テスト結果の総合データにおいて、教材としてのECの効果に関する可能性が見られた事は希望であった。

ECというコンテンツ自体は進化し続けている。(注9)このプロジェクトの実施途中である2014年末からは、スマートフォンの無料アプリを通じても利用できるようになった。これをうまく活用して学習を進めた本学学生も複数見られた。一方で、この情報を得ないまま、自宅のネットワーク環境の不十分さも重なって、ECを殆ど利用できずに終わった学生もいた。教える側として、この「学生間の情報格差や学習環境格差」を埋める動きをもっととるべきであった、と反省している。

このようなECの発展事情もふまえ、これからの授業におけるE-Learning活用については、コンピュータ端末での利用にとらわれない新しい形式を探る必要性を痛感した。今後は、本学で運用に向かう動きが始まった学内wi-fiに期待し、学内wi-fiとタブレットコンピュータを用いたE-Learning教育についても模索していきたい。

9. 謝辞

本取り組みは平成26年度石川県立大学教育改善プロジェクトの援助を受けた。受講者の英語力診断のためのテストについては、NPO法人ELPAの提供する、「英語プレイスメント」を使用し、そのデータ分析も本報告に一部引用させて頂いた。このテストの結果分析については、本学生物資源環境学部教養教育センター矢野喜夫教授の御指導を受けた。更に、株式会社成美堂の佐藤恵子氏、本学生物資源環境学部教養教育センター桶敏教授、本学法人本部辻野賢司氏をはじめ、多くの方々の御助言と御協力を頂いた。皆様に深く感謝したい。

(注1) ECプレミアムアカウント定価¥2,550(税込)のところ、テキスト付随のVOAコースとの併用のため、この価格となった。

(注2) 例えば、@を通常のメールアドレスにはありえないような奇妙な位置に入れるミスをする事から、この現象は、「学生がメールアドレスを記憶できないだけ」という理解だけでは説明できないものがある。

(注3) 成美堂担当者より確認済み。

(注4) 発話診断以外の機能は、学外でも、インターネット環境さえあれば比較的利用しやすい為である。

(注5) <http://english-assessment.org/placement.php>より。

(注6) ECのさまざまな動画を視聴する事で、まずリスニング能力向上が見込めるのではないかと予想していたからである。

(注7) この学生に関しては、発話診断以外の機能は使用可能のようであった。

(注8) 量販店等で¥1,000以内で購入できるものもある。しかし、この回答者が、どの程度の額を高価とみなしているのかについてまでは不明である。

(注9) ECの更なる進化の一つとして、GoLiveというマンツーマン発話指導機能が、2015年春に本格実用化に向けて動き出した事も付け加えておく。